
1707 年宝永地震と大坂の被害数

矢田 俊文

(新潟大学災害・復興科学研究所)

はじめに

本稿の目的は宝永地震による大坂の被害数を明らかにすることである。

宝永4年(1707)10月4日に南海トラフ周辺で起こった地震は宝永地震とよばれ、東海地方から九州太平洋沿岸地域を中心に大きな被害を与えた。津波は大阪湾にも押し寄せ、低地に広がる大坂(現在の大阪市の中心地域)は大きな被害を被った。

宝永地震の直前にあたる元禄12年(1699)の大坂の人口は35万1708人と推定されている^①。17世紀末に35万を超える人口を抱える大坂の宝永地震による被害数を導き出すことは、この地震がもたらした被害の規模を確定することになる。

しかし、宝永地震による大坂の被害数を確実な史料を用いて論じている論文はほとんどない^②。確実な史料のみで宝永地震による大坂の被害を推定した研究には、西山昭仁氏ほかによる「宝永地震(1707)における大坂での地震被害とその地理的要因」^③がある。しかしこの論文では、大坂三郷のひとつの天満組の被害数をもとに、そこから大坂三郷全体の被害を推定している。西山ほか論文を含め、これまでの大坂三郷の被害数について言及した論文は、本稿で用いる「楽只堂年録」に収載された幕府への被害報告書のような記録を検討して、被害数を求めたものではない。

そこで本稿では、さまざまな幕府への被害報告の文書を検討することによって、宝永地震による大坂三郷の被害数を確定していく。

1 被害直後の被害情報

1では、宝永地震直後の幕府への被害報告書から大坂の被害数を検討する。ここで使用する被害報告書は、町奉行所や幕府などの組織へ報告され、報告日が明確な史料である。

宝永地震が起こった宝永4年10月4日から2日後の6日までに報告された大坂町奉行所の記録を記している「鸚鵡籠中記」の記事^④から検討しよう。「鸚鵡籠中記」は尾張藩士朝日重章の日記である。

史料1

大坂

・崩家九百四十軒余、死人二百六十四人○落橋三十五ヶ所

内

・北組 崩家五百十三ヶ所 死人百廿八人

橋十四ヶ所

- ・南組 崩家二百六十軒 死人八十四人
橋損し十五ヶ所
- ・天満組 崩家百六十ヶ所 死人五十三人
橋六ヶ所

右之通今月六日迄、大坂町奉行衆へ書上御座候

史料 1 には大坂全体の被害（崩家 940 軒余、死人 264 人、落橋 35 カ所）が記された上で、その内訳として北組・南組・天満組の被害数が記されている。大坂は北組・南組・天満組で構成され、そのため大坂三郷といわれる。天満組は大川以北、北組・南組はおおよそ本町通りが境となっている地域である⁽⁵⁾。

史料 1 と日付に近い被害報告書が「楽只堂年録」⁽⁶⁾にある。史料 2 は「楽只堂年録」所収の被害報告書である。

史料 2

大坂町中崩家・死人等覚

一、崩家・納屋・土蔵共、凡九百軒程

一、死人男女、凡式百六拾人程

一、橋破損又ハ落申候分、凡三拾五、六ヶ所

右者有増如此御届候、死人追々改来、崩家等未吟味相済不申候、且又川口川中損船大汐ニ而行方不相知、又者破損致候外御座候得共、是又改相済不申候、此外撰河在々之儀、未相知不申候、委細之儀者追而可申上候

十月五日

史料 2 は 10 月 5 日の報告書で、史料 1 とほぼ同じ時期の報告書である。史料 2 によると、崩家等が 900 軒程、死人 260 人程、橋破損・落橋 35、6 カ所とある。この被害数は、史料 1 の崩家 940 軒余、死人 264 人、落橋 35 カ所という被害数と極めて近似している。史料 2 は文書の写しであるが、被害数は建物については崩家・納屋・土蔵、橋については橋破損・落橋と記され、詳細に書き留められていることから、史料 2 の方が信頼を置くことができる。しかし被害の実態が詳細であるとはいえ、数字は近似しているので、史料 1 と史料 2 の情報源は類似のものと考えられる。地震の翌日の 10 月 5 日に把握された大坂町中の被害数は、建物被害（崩家・納屋・土蔵）約 900 軒、死人約 260 人、橋の被害（破損・落橋）約 35、6 カ所とすることができよう。

10 月 5 日に把握された被害状況は極めて限定的なものであり、史料 2 にもそのことは記されている。史料 2 によると、死人数はおいおい改められることであろう。崩家等についてはいまだに調査が終わっていない。また、大阪湾の川口川中の破損した船は津波に流されて、行方がわからなくなっている。さらに船は破損したであろうが、その破損状況の調査も終わっていない。大坂三郷以外の摂津国・河内国の被害状況は不明である。詳細は追って報告する、と記される。史料 2 から読み取れる被害状況は地震翌日の 5 日に把握されたものであることは明白である。したがって大坂三郷の被害の全体像を指し示すものとは到底いえない。

史料 2 は日付のある文書で、幕府が把握した信頼のおける情報であるが、あくまでも地震直後の情報であり、被害の全体像を示す史料ではないのである⁽⁷⁾。10 月 5 日より後の確実な被害報告によらなければ大坂三郷の被害の状況はわからない。

2 宝永地震の大坂の被害者数

2では、10月5日より後の被害報告書によって、大坂三郷の被害状況を把握したい。次の史料3は「鸚鵡籠中記」の記主朝日重章と同じ、尾張藩士天野信景が書いた随筆「塩尻」巻二十四^⑧である。

史料3

摂州大坂地震之惣改

- | | | |
|--------------|----------|--------------|
| 一、棟数六百三軒 | 一、竈数一万百軒 | 一、圧死三千六百廿人 |
| 一、高潮溺死一万二千人余 | 一、落橋廿二ヶ所 | 一、破船大小六百五十余艘 |

「塩尻」には史料3の「摂州大坂地震之惣改」のあとに「紀州熊野地震改」が記される。「摂州大坂地震之惣改」「紀州熊野地震改」ともに筆者の解釈等が記されていないことから、この部分は「摂州大坂地震之惣改」「紀州熊野地震改」という史料をそのまま抜き出して、書き写したものと思われる。

史料3の棟数は役数（課税の単位、課税される家の数）で、竈数は世帯数である^⑨。棟数よりも竈数を把握することが大坂の被害状況を知るためには重要となる。史料3によると、被害数は棟数（家数）603軒、竈数（世帯数）10,100軒、圧死者3,620人、溺死者12,000人余、落橋22カ所となる。

史料3の被害情報に記される被害数と同様の数値が記された史料として、次の「鸚鵡籠中記」の記事（史料4）がある。

史料4

- ・町方竈数一万六千余潰○落橋二十六ヶ所
- 廻船川内にて破損 三百二十二艘 但八百石以下の小船不知数
- ・地震にて圧死 三千六百三十人
- ・高浪にて溺死 一万二千百人余

是は地震後、浜近所の輩又地震あらん事を恐れ、皆々船に乗り、及金銀財宝を積入罷在候処に、申半刻高浪来りて、川口にかけ置たる大船、高浪に乗して矢の如くに来る、此船の下へ人の乗たる小船皆入て圧れ溺死する也、或は地震の節、橋等渡りかゝりて死するもあり、

右は今月十日迄之書上也、此外船に大分死人有之、一々不遑数之、十日の評定には二万人の余と云々、

史料4は、「鸚鵡籠中記」の記事で、史料1で紹介した大坂町奉行衆へ書上げた被害状況の報告書に続く記事である。史料4をみると、大坂の被害は、竈数（世帯数）16,000軒余、圧死者3,630人、溺死者12,100人余、落橋26カ所とある。この数字は史料3の竈数10,100軒、圧死者3,620人、溺死者12,000人余、落橋22カ所に近似している。圧死者、溺死者の数はほぼ同じである。ちなみに史料4の後には「紀州熊野地震改」⁽¹⁰⁾にもとづく記事があるが、「鸚鵡籠中記」の紀州の被害数も随筆「塩尻」の数値と同じである。

「塩尻」と「鸚鵡籠中記」の宝永地震記事を検討した鶴飼尚代氏⁽¹¹⁾は、「塩尻」と「鸚鵡籠中記」に類似の記事があることから、両者の間に情報の流れがあったと推定している。史料3と史料4を

比較しても、両者は情報源を同じにしていると考えてよいと思う。

さて、史料4には、竈数・圧死者・溺死者・落橋等の情報は「今月十日迄之書上」に基づくものであると記されている。史料2の「楽只堂年録」は幕府に送られた被害報告書である。史料1も史料2と数値が近似していることから幕府に送られた被害報告書であり、それを尾張藩が入手したものであると思われる。史料1と史料4はともに「鸚鵡籠中記」の記事であることから、史料4の大坂の被害報告書は幕府経由の情報と考えてよからう。

さらに、10月10日迄とあり、史料2の5日後の報告書であることがわかる。被害数は史料2(10月5日)では、建物被害(崩家・納屋・土蔵)約900軒、死人約260人、橋の被害(破損・落橋)約35、6カ所となっていたものが、史料4(10月10日迄)では竈数16,000軒余、圧死者3,630人、溺死者12,100人余、落橋26カ所となっていて、数字が大幅に増えている。落橋の箇所は減っているものの、死者数は圧死者約260人から圧死者3,630人、溺死者12,100人余へと、実に約60倍も増えている。史料4には、竈数(世帯数)も記載され、死者は圧死者と溺死者に区別され書き上げられ、記載が詳細になっている。これは5日間の被害調査の結果、詳細な情報が得られた、把握された、と考えられるのではなかろうか。

尾張藩士が記録した宝永地震の大坂の被害記録には「塩尻」「鸚鵡籠中記」以外に、堀貞儀が記した『朝林』がある。『朝林』の宝永地震の大坂の記事については、鵜飼氏⁽¹²⁾によって情報源を異にすることが明らかにされている。以下、『朝林』⁽¹³⁾の記事(史料5)を検討しよう。

史料5

大坂にて地震波にて家人損シ死人書立

一、かまと数三千五百三十七

此町役六百五十三軒 役家

一、五千三百五十壺人

是ハ家つふれ押ニうたれ死申候

一、壺万六千三百七十壺人

これハ水に溺川へ入死申候

右十月十日迄 公儀御帳面之写のよし

史料5には、「公儀御帳面之写のよし」とあることから、幕府の被害報告書を写したものであると思われる。さらに被害報告は10月10日迄のものであることがわかる。史料から大坂の被害は、竈数3,537、軒数(町役・役家)653軒、圧死者5,351人、溺死人16,371人であったことがわかる。

史料5の被害数と先にみた史料4の被害数を比べると、史料4が竈数16,000軒余、圧死者3,630人、溺死者12,100人余であるのに対し、史料5が、竈数3,537、圧死者5,351人、溺死人16,371人であった。竈数があまりに違い過ぎることについては理解できないが、圧死者・溺死者については極端な違いがなく、いずれも史料5の方が多い。史料4・史料5はともに、幕府が把握した良質の情報と考えられる。そう考えると圧死者・溺死者の数の違いは把握した日の違いと考えるのがよいと思われる。

このような理解は、史料4に「十日の評定には二万人の余と云々」と記され、今月10日までの書き上げによる被害数を列挙しながらも、10日の評定で死者2万人と報告があったと記していることから、史料4より史料5の方が後日に把握した被害数であると考えられる。

以上のことから、幕府が宝永4年10月10日までに把握した宝永地震による大坂の被害数は、竈数3,537、軒数(町役・役家)653軒、圧死者5,351人、溺死人16,371人であったと考えられる。

おわりに

本稿で明らかにしたことは以下のとおりである。

宝永4年(1707)10月4日に南海トラフ周辺で起った宝永地震による大坂三郷の被害は、竈数3,537、軒数653軒、圧死者5,351人、溺死人16,371人であった。ただし、この被害数は地震が起きた6日後の宝永4年10月10日までに幕府が把握した被害数であり、これが確実な史料で明確になる大坂三郷の被害数である。

「楽只堂年録」をみると、各藩が地震直後に幕府へ提出した被害報告書を後日新しい情報に修正して報告していることが読み取れる。たとえば「楽只堂年録」所収の三河吉田藩牧野大学から幕府あての10月20日の届書を見ると、「最前書上候潰家千八百三拾六軒と合、三千八百拾五軒 潰家」と記し、先に潰家の数を1,836軒と報告したが潰家3,815軒へと修正している。

三河吉田藩と同様に大坂の被害数の新しい状況が町奉行衆や幕府へ報告されたと思うが、現在残存する史料ではそのことが確認できない。最終的に確定された宝永地震による被害数は史料が存在しないので不明であるということになる。よって、宝永地震による大坂三郷の被害は、竈数3,537、軒数653軒、圧死者5,351人、溺死人16,371人以上とするのが正確であると考えられる。

本稿は、人口の多い大坂三郷の被害数を検討した。宝永地震の被害は東海地方から九州まで広範囲に被害をもたらした。紀伊半島については、「紀州熊野地震改」等の確実な史料が存在する。今後、紀伊半島等、宝永地震による被害の検討を進めていきたい。

註

- (1)『大阪市史 第一』大阪市参事会、1913年
- (2)前掲『大阪市史 第一』、都司嘉宣「大阪を襲った歴代の南海地震津波」『歴史科学』187号、2007年、北原糸子ほか『日本歴史災害事典』吉川弘文館、2012年には大坂の被害数が上げられている。
- (3)『京都歴史災害研究』10号、2009年
- (4)『名古屋叢書続編 第十一巻 鸚鵡籠中記(三)』名古屋市教育委員会、1968年
- (5)幸田成友『江戸と大阪』富山房、1994年、原著1942年
- (6)「楽只堂年録」第二〇八巻～第二一〇に、幕府への藩・寺社等の被害報告書が記載されている。この報告書はすでに、『新収 日本地震史料 第三巻 別巻』(東京大学地震研究所)に翻刻されているが、柳沢文庫所蔵「楽只堂年録」紙焼本を使用した。なお、『新収 日本地震史料 第三巻 別巻』は史料2の箇所を翻刻に誤りがある。
- (7)「楽只堂年録」記載の大坂三郷の被害報告は史料2のみである。大坂のような人口の多い地域の最終的な被害情報が掲載されていない「楽只堂年録」を集計しただけでは全国の宝永地震の被害の全体像は把握できない。
- (8)『日本随筆大成 新装版(第三期)18』
- (9)幸田成友前掲『江戸と大阪』
- (10)「紀州熊野地震改」については後日検討する。
- (11)鵜飼尚代「宝永四年の大地震記事をめぐって—『朝林』と『鸚鵡籠中記』—」『東海地域文化研究』16、2005年。なお、鵜飼氏は、宝永地震に関する『朝林』『鸚鵡籠中記』『塩尻』の記事の相互関係を考察しているが、被害数の検討はされていない。
- (12)鵜飼尚代前掲「宝永四年の大地震記事をめぐって—『朝林』と『鸚鵡籠中記』—」
- (13)朝林研究会編『共同研究報告書12 朝林後編』名古屋学芸大学短期大学部地域文化研究センター・名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究所、2010年、なお史料5の翻刻については、名古屋市蓬左文庫所蔵「朝林」写真複製本で確認している。